

山間地域におけるトチモチを活かした地域おこし

手代木 功基

■ はじめに

トチノキの種子であるトチノミを加工した食品は、日本国内の山間地域で広く食されてきた。特にトチモチは、穀物の生育に不適な山間部において救荒食として位置づけられるとともに、一部地域ではハレの日の食べ物となってきた。トチノミはそのままでは食べられず、アク抜きが必要である。トチノミのアクは非水溶性であるため、加熱処理、アルカリ化、流水処理など複数かつ複雑な工程が必要であり、アク抜きの技術は地域ごとに発達してきた。

しかしながら、高度経済成長にともなう産業構造の変化や食生活の均一化等によって、トチモチをはじめとしたトチノミ食は急速に衰退している。また、山間地域の過疎・高齢化にともなって、アク抜き技術の継承が途絶え、トチモチの生産が不可能となった地域も存在する。

このような状況の中で、自家消費用としてトチモチが作られてきた一部の山間地域では、トチモチを地域の特産品として販売するという動きが起こってきた。こうしたトチモチの特産品化の動きは、縄文時代から続いてきた日本のトチノミ食が今後も継続していく上でも新たな展開として注目されるが、全国的な現状も含めて不明な点が多いのが実情である。そのため報告者は、これまでトチモチの販売状況について調査を進めてきた。

本報告では、トチモチの特産品化に成功していると考えられる滋賀県高島市朽木地域と石川県白山市白峰地域を事例として、トチノミの採集から生産・販売にこれまで関わってきた地域在住の方と研究者で座談会を行って、地域ごとの違いや共通点等を探ることを目的とする。

そして座談会の内容をもとに、地域固有の製品がいかにか地域の活性化に繋がり、そこからどういった展開が考えられるのかについて検討したい。また、座談会は地元在住の方々と実施することから、住んでいる地域に研究者が入ってきて「研究」をすることが、どのようにとらえられているのかをすることを通して TD とのつながりについても考察する。

■ 座談会について

座談会は石川県白山市白峰と滋賀県高島市朽木で実施した。それぞれの出席者は以下の通りである。座談会は白峰においては NPO 白峰自然学校が拠点としている古民家の囲炉裏を囲んで行った。朽木においては、雲洞谷地区にある山原さん宅の軒先で行った。

【白峰における座談会の参加者(2014年11月3日に実施)】

織田 毅：白山市白峰出身・在住で、同地において菓子店「志んさ」を経営している。ご自身で和洋菓子を製造し、店舗で販売する。トチモチは店の主力商品になっている。

織田 寛嗣：白山市白峰出身で現在も在住。定年退職したが白山ろく民俗資料館の館長を長年つとめられており、白峰地域の自然・民俗等に詳しい。また、胸高周囲が日本一の巨木である「太田の大トチ」を所有されている。

飯田 義彦：東京都出身の研究者。専門は造園学・景観生態学。現職は国連大学サステナビリティ高等研究所いしかわ・かなざわオペレーティングユニット研究員。朽木地域で2011年からトチノキ巨木に関する調査を実施しており、今後は白峰地域において調査を予定。



写真1 白峰での座談会の様子

藤岡 悠一郎：京都府出身の研究者。専門は地理学・アフリカ地域研究。現職は東北大学学際科学フロンティア研究所助教。朽木地域で2002年から調査を行っており、トチノキに関しては2011年から本格的に調査を実施している。

手代木 功基：福島県出身の研究者。専門は地理学。現職は総合地球環境学研究所プロジェクト研究員。朽木地域で2011年よりトチノキ巨木に関する調査を実施している。トチモチは幼少の頃にときどき食べていた。

【朽木における座談会の参加者(2014年11月21日に実施)】

澤田 龍治：滋賀県高島市朽木出身・在住で、元朽木村役場職員。朽木におけるトチモチの販売や日曜朝市の開始といった地域振興に中心的に関わった。

山原 伊一郎・昭子夫妻：滋賀県高島市朽木出身・在住で、元林業家。伊一郎さん、昭子さんともに、幼少の頃から山にトチノミの採集に行っていた。

飯田 義彦：前出

藤岡 悠一郎：前出

手代木 功基：前出

■ 地域の概要

白峰地域は、石川県南部に位置しており、白山の登山口として知られている。2005年に白峰村が周辺市町村と合併して白山市となった。手取川の上流部であり、山間部で水田が少ない。歴史的には焼き畑耕作を主とした「出作り」や、養蚕業・薪炭業が盛んな地域であった。

朽木地域は、滋賀県最西端に位置し、西は京都府、北は福井県に接する。2005年に朽木村が周辺市町村



写真2 朽木での座談会の様子

と合併して高島市となった。琵琶湖に流入する安曇川の上・中流域を占める。歴史的には小浜と京都を結ぶ鯖街道の街道筋として栄えた。また、「朽木の杣」と呼ばれ、京への木材の供給地であり、林業が主産業となってきた。

■ 対話の記録

座談会は、それぞれ二時間程度の時間をかけて行った。全ての内容を盛り込むことはできないので、「トチノミの採集」、「トチモチの販売に至る経緯」、「地域振興と研究者の役割」という3点に絞って記述した。また、対話の背景や補足説明等をあわせて記載した。なお、会話中に出てくる会社名や個人名は、特定を避けるために基本的に略字にしている。

トチノミの採集

朽木・白峰両地域では、昔からトチノミ採集を行っていた。トチノミは以下の〔朽木にて〕での会話にみられるように、「たくさん採れた」という。

〔朽木にて〕

手代木：昔の採集はどうだったんですか？

山原：私が若いとき行ったのは、片道15分から20分歩いて、谷沿いを、ずっと歩いて、それで、また谷、何て言うか、登れんところは、山へずっと上がって、まあ15分から20分くらい歩いて行ったぐらいいには、それは近いうちやけど、木はあるんですが、これぐらいの。そんでそこで捨て、まあ袋に何杯か拾いますわな。それをまた今度は、何回か、たくさん背負えんから、昔はたくさんあったんや。ほんで3往復かそこら、してたんやわな。

飯 田：3往復。

山 原：うん、それぐらいだった。

手代木：それは、1本の木から。

山 原：まあ、1本ちゅうか。

手代木：その辺りに、いくつもあるわけですか。

山 原：うん、まあ、2、3本あるんや。

一方、現在のトチノミ採集について見てみると、朽木では獣害（主にシカ）によって「トチノミがとれなくなっている」ことが問題となっていた。白峰でも採集できる量は減っていることが指摘されたが、それよりも「トチノミを採る住民が高齢化している」ことが重要な問題として認識されていた。

[朽木にて]

山 原：去年は豊作でも、今年はないやろな。行ってきはったか。

藤 岡：去年、多かったですね。ただ、あれ、台風、台風で流されたのって去年でしたっけ。

山 原：去年。

藤 岡：台風が9月ぐらいい来て、もうだいぶ落ちてしまっ。今年、そんなに量はたくさんなかったですけど、ただ、谷のなか、水のなかに落ちてて、それを拾いましたね。

山 原：タイミングをよう行くととれるね。水に浸かるとるやつは、鹿食わへんから。

藤 岡：ええ。

山 原：そいで、水が出たら、皆流れてまうわけやろ。うまくいてるといふんかな。そんで、そうや、トチに困っとらんから、もう行っとらんだけで。本来は行ってやるのがよいんやろけど。もう80にもなったら、もう山も行けんもん、ととも。

[白峰にて]

手代木：特にお菓子を作る際のトチの実の手に入れられる量とかっていうのは減っていつているんですかね。それとも、それでもまだ採れるんですかね。

織田（毅）：うちの場合は、減ってるっていうか、うちにトチの実を採って持ってくる人が段々高齢化でっていう問題のほうが大きい。

手代木：ああ、なるほど。

織田（毅）：山行って、少なくなってきたというよりも。まあ確かに、今年・去年はすごい不作で、少なかつてんけども、その問題よりかは、採ってくれる人が・・・。

手代木：高齢化。

織田（毅）：もう腰が痛とうて、かんで来れんとかのほう。そっちのほうがすごい。

トチノミが年々採れなくなっていることをうけ、白峰の菓子店ではトチノミがたくさん採れた年に冷凍してストックしておくと話していた。さらに、この地域では早い時期からトチモチが商品化されてきたため、トチノミの需要も高く、自家消費用として採集されてきたトチノミが高値で取引されるようになっている。

[白峰にて]

藤 岡：年間どのくらいトチの実が必要、というか、拾われるんですか？

織田（毅）：ううんとねえ、実際たぶん使うのは、生の状態で2tぐらいいかなあ。

藤岡：生で2t。

織田（毅）：そらやっぱ、集まってくるときは、やっぱ3tでも欲しいかな。やっぱ昔からやっぱり3年分ぐらいストックするっていうにゃあ、トチの実は。

藤岡：3年分っていったら、もう5～6tぐらいですか？

織田（毅）：ううん。だから、ならん年があるから、だから、変な話、前まではやっぱり2、3年分、いや、2年前採った、収穫したやつを使ってるっていう2年、3年前のやつでやってるけど、ここほんと2年ほど不作なんで、もう今、現時点で去年の使とるんですよ。

手代木：あっ、そうなんですか。

織田（毅）：だから、来年も不作やと、ちょっと来年以降は、商売どうしようかなあと考えざるを得ん、ちょっと。
—中略—

織田（寛）：で、結構高い値で取るはなあ。

織田（毅）：ううん、まあ、ううん。

織田（寛）：N産業のA社長、初代の。自分の長男に、金は努力せな儲からんもんやちゅうことを教えるために、トチの実拾いに行ってる。あの長男が小学校のときや。ほいで、志んさへ売ったよな。たくさんくれて、なんと、金ちゅうのは簡単に儲かるもんやて。

織田（寛）：1時間か2時間捨て、恐らく万近い銭もろたんやろ。簡単に儲かるもんやなあちゅうて言うらしい。

織田（毅）：まあ当たりの木に当たれば、すごいいっぱい採れるから、簡単にやけど。けど、自分もよく採りにに行くけど、ほんとないときは、もう山中すごい歩いて、10kg、20kgしか集まらんときもあるで。で、そのときは、なかなか儲からん。儲からんちゅうか、大変。

織田（寛）：そやなあ。それが、たまたまあそこに向かうさかい。

織田（毅）：V字の谷のああいうところに、たまたま行ったとこ向こうて、それも、すごい豊作のときに向かえば、もう動かんでも、こうして入れて、持ってくりゃ、そりゃあ、もうほんとに1時間もせんうちに50kg、60kgだし、100kgほどかんでこれるし。

飯田：100kg。それ、毎日行かれるんですか。9月の実が落ちる時期っていうのは。

織田（毅）：行く人は、毎日見に行く人もおる。最盛期はほんと、毎日行っても落ちてるし。捨てる最中でも、ぼとんぼとんぼとんと落ちるから、ううん。うちらも行きたいんやけど、なかなか。皆持ってきてくれる、今度持ってきたトチを、今度は処理せんなんし。その世話をしていると、なかなか行けんくなってきて。まあけど、来年辺りは、そんなことも言うてねえ。ほんと、毎日ぐらい行かんなんぐらい、ちょっと、ううん、今、実が少ないんやけど。ちょっと今は。

トチモチの販売に至るまで

これまで自家消費用として食されてきたトチモチが商品化した経緯を見ると、どちらの地域にも旗振り役として動いていた人物の存在が窺えた。しかし、キーパーソンの特性（個人・行政・民間企業など）によって、地域内の他の住民がトチモチという資源を核とした地域おこしにどう関わるか、そしてどのような恩恵を受けるかは異なっているようである。

[朽木にて]

澤田：町づくりやないけど、村おこしせんなん、朽木もあかんわ、本陣（道の駅）が行き止まりやったんやもん、その時分はな。こっちはトンネルでできとらんやさかい、行き止まりみたいなもんや。役場を通り、京都行くの、往生したで、あっここの今の牛の穴トンネルってあるけど、あっこ道が、もう離合できへんな。あれが一番かなわんがな。てなこと、あっこ、トンネルゼロやったやもん。

花折もトンネルちゃうし、トンネルって1個もなかったの。そやから、向こうから来るのは珍しい人が来る程度で、本陣できても誰も来なんだし、グリーンパークできても、お客さん来ると珍しなんて。いや、ほんで、全体的に何かせんなんなっていうことやったのはあったり、そんで、ここの人はスキー場できてる。そこで、何かどうやって、雲洞谷のトチ餅とぜんざいぐらいしかないなかということで、Oさんいったんやろ、Mさんもいったやろ。そんなことあったりして。

—中略—

澤 田：トチ餅はほら、前言うたように、1つは、ほかのもんでもそうやけど、売れんかったらもう、トチ餅せえへんやんな。白餅つくような調子いかんしよ、トチ餅は。そやから、売れるように何とかできんかなと思って。売れんなんだら、今言うたように、誰もせんと残っていかへんし。それが1つあったのと。これで、ちょうどタイミング的にそういう担当やったんやな、役場やら、農業関係や転作関係の担当やったんや。ほんで、うちとこのなんかでも曲がり角やったんやもんな、その時分に、ほ場整備し始めたりなんやして。何かどうやろうとかいうこと、ごちゃごちゃ、ごちゃごちゃ、週刊誌かなんやでいうとったなかで、わしの思うたのは、思うというか考えとったのは、餅やと幾種類もできるなど思うて。知らんわい、そんなもん、商売人違うしの。ところが、そこでよ、トチは茶色やんな、白やろ、ヨモギは緑やんな。ほんで、粟とキビはどうや知らん。黄色となんかなるやん、5種類に色がよ。

山 原：なるな。

澤 田：うん。ほんで、こんな箱にな。まあ、知らんで、素人や。五色もち、雲洞谷の。そんなこというてしたらどうやろとかなんかいうて。

山 原：そこからまた、ほんで、特産品とか、そんなあれがあって、先立って気張ってやってくれたさかいに、今があるんやと思うけどな。

[白峰にて]

(トモさんが先見の明があったという話で盛り上がる)

織田(毅)：うちらでも、実際、うちで、トチ餅始めたうちの親父っていうけど、あれを提案してくれたのは、トモさんやってんて。

織田(寛)：ああ、そうか。

織田(毅)：で、トモさんとうちの爺、親戚関係やけど、ホンコさまっていつて、ホンコさまの酒飲んでる席で、二人で話しちよったら、トモさんが、トチ餅たらあるけ、商品、わんげの兄貴の和菓子屋さん、いっちょったけど、あれなんか、できんやんかっていう話から、トチ餅を商品化したみたい。うん、その、ツルノトモさんがその、一番最初にしてみんかって言うて、してみいよっていう話になって。だから、うちの婆ちゃんは、その、たまに、ツル、向いて、足向けて寝れんじゃあつって。

織田(寛)：そんなこと言うとなら、どっち向いても寝れんようになるぞ。

織田(毅)：そうね。っていうのを、よう、婆ちゃん、そういう話を聞かせてくれたことある。

手代木：だいぶ前ですか。

織田(毅)：だから、俺が生まれるずうっと前の話やさかいに、自分、もう、昭和30何年ごろかな、6年か7年か、そのころやないかな。

過疎地域に指定されている朽木では、補助金を利用して温泉や道の駅の建設が可能になった。このような他の地域振興策のなかでも、あまり目をむけられてこなかったトチモチは「この地域にしかない目玉」として機能していた側面を持つと考えられる。ただし、トチモチ生産は、アク抜きや灰の入手等、手間がかかるため継続していくことは容易ではない。

[朽木にて]

澤 田：だから、前言うたかしらん、貧乏の村やけんど金は使えたんやもんでな。100万しかなかってでも、150万か、いやいや130万か知らんけんど、なかつたでもそんなんで、みてもろたけ、いろんなもんがほんでできたやろ。グリーンパーク（温泉）にしろあんなもん普通の朽木だけの財政力やたらなんにもそんなもんでできるはずがないんやけんど。これやったらいうて、ちょっとやりかけると珍しかったんちゃう。あんな山奥でなんかやととるて。そう思うて。トチ餅はあれやろ、結構こちらで考える以上に外では珍しかったんちゃう。

手代木：そうですね。

澤 田：特に今もこれもそうやし、技術的なこともそうやし、いろんなことでせんようになったやん。昔から失敗も多いし、簡単にはいかへん。やめてくるわ、さっき飯田さん言うたように、やっぱりしようかっていうたかて、そんな簡単に一白分ぐらいの灰が手に入っても、できへんです。

さらに、特産品としてトチモチを生産していくなかで、朽木のトチモチにもリピーターがつきはじめた。また、トチモチ生産・販売に携わる住民たちは商売のプロではないものの、販路を確保していくために常に新しい戦略を探っている様子が窺えた。

[朽木にて]

山 原：もう20年からなるけど、20年余るわな。

山 原：それで、その、リピーターか何かしらん、とにかく、（トチモチ）好きな人がいはるから、まあそれなりに、おばあさんらのあれで、まだ続いているけれど。ほんで、それは、学校出て一人前の人が、まあ一生懸命やれば、それはちっとはなるかしらんけれど、ある程度、こういう確保ができんとな。

手代木：うん、そうですね。

—中略—

澤 田：やっぱり前トチ餅をやとったとこで行くほうが、よう売れたね。

飯 田：なるほどね。

澤 田：新しいとこっていうか。新しいとこの開拓、全然トチ餅知らんとこ行くと、何やこれはって。ニツキ餅かって。あんもなんにも入ってない。甘くもなんともない。この中途半端なものはね。たとえば若狭のほう行くと、あん入れたやつと違うのをって、年寄り、おばあらは。あん入れるのはいらんかというて。

手代木：そっちのほうがいいですよ。

地域振興と研究者の関わり

報告者に限らず、外部からの調査・取材等に対して、朽木の座談会では「忙しいのに困る」「同じことばかり聞かれる」という正直な声も聞かれた。しかし、そういった基本的なマナーを守っていれば、聞かれることに対して「話したくない」という思いはないようであった。

[朽木にて]

手代木：こうやって僕ら研究っていうか調査で来てるんですけど、調査で外部の人がいろいろ話を聞きに来ることは、どういうふうに思われますか？正直なところ。

山 原：われわれはあれやけんど、ある人にいうと忙しいのに腕を引かれて困るなという人はおられた。

手代木：やっぱりそうなんですね。

山 原：それはもちろん私ら、今の時期かまへんのやけんど、そういう人はおられたわ。聞いた。

手代木：やっぱり、そうやって忙しいときにも結構聞きに来る人とかもかなりいるわけですかね。

山 原：そうそう。いはったみたいやな。取材でね。そのすぐそこでも、忙しいのに聞かはったんかな。みんながみんなそうやないと思うけど。そら、かまへんわいな。聞いてもらうことに対して、時間あったらあれやけど、そういう話は聞いたわ。何回も同じことを聞かれるとそう思うみたいやけどというのは、ちょっと誰か言えんけど、そんな話は聞いた。誰でもできるもんじゃないと思うさかいに。企業秘密とかそんな感覚とはちごうて。そういう人はおらへんけど、言いたくないわっていう話は聞かんけど、忙しいもんでというのは聞いたことある。

また、朽木では住民の生活に深刻な被害を与えている獣害に対して、解決に資するような実践的な調査、そして提言の必要性が窺えたと同時に、市町村合併後の行政が朽木の事情を理解していないということへの不満が聞かれた。

[朽木にて]

手代木：あと、たとえばいろんな問題があるじゃないですか。サルの話とかもありますし、トチノキの話とかもあると思うんですけど。研究で役に立てるところというのは、どういうことでしょうか。

山 原：そうやな。どこの田舎でも困っとることは、とにかく獣害がひどいもんで、その獣害に対して狩猟免許のある人しか対応できんとか、ただ追い払うだけやとかいうことに対して、皆、不満を持つとる。農業しとる人は皆そうやしな。山でも。クマが出てきたさかいいうて、麻醉銃打って、また国有林放すんならええけど、また自分とこの山へ、どこの山やわからんとこで放して、それを広報はしとるんやろうけど、それで山行ってやられる人もおるわな、やっぱりクマあれやから。そういう感覚の行政とかの思いが、やっぱりちょっと考えてもらわんと。それによって、獣害やらでもう百姓辞めようかってなる。そうすると集落がばらばらやわ。農業はさすわけにはいかん、獣害は守らな。そんなことの無理なあれをしとんやから、今は。縦割るか横か知らんけれど。そういうことは、やっぱ、通してクマでも出てきたら、駆除してやでっていうのは。それは人間の勝手やっていうものの、やっぱそれは違うとは思うで。それは、クマも出てきて専門家、何頭クマおるってそら言うけど、そんなもんわかるはずない。人間でもそうやけど、今、生まれて百何人の子どもの行方がわからへんのやわな。こないだテレビで言うってた。それと一緒に、国勢調査したっていい加減なもんや、何人まで出すけれど。それと一緒に、そんなもん、クマが山いろいろいるのに、何頭おる、そんなことを。マグロでもそうやわな。マグロは捕るんやけど、クマなんかはやっぱり人里出てきて、人に危害を加えたり、農業被害をやられた場合は、それなりに駆除してっていう研究っていうか、それで対応してもらわんと。だんだん人はおらんようになる。

澤 田：ここらまでな、地方は入っとらへん。

山 原：ほんで、それならそれでそういうて、言うてくれりゃええやさかい。あんたところはもう除外やということなら、考えんなんやけどな。

澤 田：わからんのちゃうか。

山 原：知らへんのやわな。ほんで、前からわしだけか知らんけど、平成の合併があつてやで、そのとき初代の市長とか、役場の職員やら新市の職員、市長になるわな。そしたらやっぱり出身の旧町の人はここら知らへんのやわな。

手代木：そうですね。

山 原：誰一人、回らへんやろ。それが昔は行政懇談会ちゅうのがあつて、やっとなるけれど。それで県でも一緒やな。知事さんが新たにできても、そらここら来るはずあらへんのやし。

藤 岡：そうですね。

山 原：そやけど誰一人なんも知らへんがな。それがおかしいんやと思う。特に合併したら特にそうやと思うで。高島市、6カ町村が合併して、安曇川に高島市庁舎ができて、そこに市長ができてやで、その人が、マキノ、朽木含めて新市の各集落ちゅうか、現状、できたらもう職員連れて見て回ったかいうたら、それはないと思う。

飯 田：なんか僕らが調査をして、こういう問題がありますよっていうことはそれなりに意味はあるとか。

山 原：そりゃあるわな。あると思う。それは私ら合併した当初から、そう思うとるし。それがどの知事選挙や何でもそうやって。なんやかんやいうてやるけど、それはもうまったくつまり体をなしとらんちゅうか、ほんまに国民のためを思うての政治をしとらんと思うわな。それはもう言えると思うで。だからこら都会やったら警察が出て、サルが来たら追い回しとるけど。電話したかて、おまえら山のなかにおるんやったら、感覚や。いや、それと一緒にやて。だから思いがちゃうけど。その、ばらばらやっていうのが困んやがな。ある程度動物大切にしてくれるのもええけど、金かける必要もないちゅうんなら、それでええんやし、そこをはっきりせんと、どうしても具合悪いと思うわな、これ。そんなこと。とにかく、こらはもう百姓しか生きていけへんから。…中略…そこらが私らは、私の思うのはやで、そうやと思う。だからほんまにもう田舎を切り捨てるんなら、そりゃそんでええけど、人口は減るんやからな。そりゃええんやけど、それを片や残そうとする、片や方針通りより、田舎ははえてこんさかいあかんもんな。いうのはあるんちゃうけ。

澤 田：ようその地域に住む人を確保しとかんと。確保しようと思うとここで収入がある方法やの。一番簡単なん、ここにある資源を金にすることが一番簡単やろ。スギでもええし、トチのことでもええし。ここからどっかへ通って、会社勤めして、大きい所得があつたって、地域のつながりはないんやからの。地べたとのや。簡単なことや。実際そうやろうの。元おった役場の職員でも、もう皆、下へ家建てておるわな。

一方で白峰では「白山信仰」に関する民俗学的な調査も数多く行われてきた。そのなかで、研究者が主催する会合や調査にも関わったことのある織田（寛）氏から、研究者らが用いる「言葉（学術用語や普遍的な学名）」と地域の実情、そして方言で表現される言葉への多様な解釈との間に乖離が存在することが厳しく指摘された。以下、長文になるが重要な指摘なので引用する。

[白峰にて]

織田（寛）：希望があるのはね、こういうことがあったよ。わしのとこに電話がかかってね、東京から。女の子で、第2分科会を開きたいので、お宅さん、講師になってくれんかちゅうて。で、どっかの大学の研究サークルかなんかかと思って、わかりましたちゅうたら、受講者の名簿を送りますからって、名簿みたいのいらんわね。そのうちにFAXが、チッチッチって鳴って見たら、驚いたよ。分会長、Sや。で、受講者、Nったら元文部大臣や。Iったら元東大の学長や。ほいで、あれ、忘れた、宗教、京都のB大学の教授で、宗教学のドンみみたいな人や。O大学学長、T大学教授とか、こんなもん早速断ろうと思ったんやけど。そしたら、まあ、しゃあない引き受けたよ。当日、逆に質問したよ。わしが疑問に思うてることを逆にぶつけたよ。謙虚に、謙虚に。そのうち、あくが出てね、自己主張始めてん。そのうちの一つが、雑穀から始まったんよ。S先生。雑穀というのは差別用語やと。少なくとも小豆ぐらいは五穀に入っとるんやし。なんか、ここの住民が雑な食べ物を食べたという感覚が強いさかい、ちょっと物を書くときに考えてくれちゅうたんやな。それから、もう一つ。言葉遣い、今、言いたいのは。全部、ありきたりの教科書用語で書いてあると。できたら、方言で書いてくれと。というのは、その当時の住民の心情、気持ちが伝わるんじゃないかと。たとえば、例1、順番に四つほど言うたんよ。たとえば、享和元年は大凶作で出作り農民が苦勞したって教科

書読むと書いてあるけど、当時の農民は、今年はあるまでできてくださらで、難儀なことでございます。できてくださらでっていうのは、自然頼りやわね。神頼みっていうか。そして文句じゃない。それから次に豊作になると、今年はどうできてくださってという、神仏というか、どういうふうに解釈するは読むもの自由やと。方言で書いたほうが、読者はあんたら、3人おりゃ、3人の解釈ができるんやと、方言で書けば。通り一遍の教科書用語では伝わらんと。たとえば、その言葉、それから、山菜を利用したということがあるわね。カタハってあるわね、ウワバミソウ、これはあの非常に、野菜ができるまでの期間とか、利用期間が長いんや。だから、山へ行って、おかずのないとき、味噌でも醤油でも持って行って、いしなかなんかで潰して谷川の。ねばねばの団子みたいになるやな。それに醤油か味噌つけて食べればいいと。そういう非常に便利なもんで、それを単純に、カタハ、ウワバミソウ、利用価値が高くなんとかって書いてあるわ。ところが、方言で書いたらね、ある人は、タニフタギって書くんやわ。この辺ではタニフタギって言ったら、谷をおおうほど生える。それとオジョロウサマっていう言葉を使うところがあって、女郎って職業あったわね。それにおをつけて、様までつけた。そういう、方言で書くと、なぜって疑問を持つでしょう。私は、二つ想像したわ。そういう食べ方するもんやさかい、女の人のすべすべした肌を想像するのと、もう一つは一家の犠牲になって、自分の身を売って、犠牲になつとるわね。だからオジョロウサマやさかいに、絶対にその踏み潰して歩いたり、粗末に取り扱わんわけや。で、わしらやったら谷をおおうだから、うまそうな太いところ、だだだだつと。小さいの踏み潰して、ええの採ってくるわ。ところが、オジョロウサマと呼ぶと、そうはいかんわけや。一家の犠牲になったもの、踏み潰して歩くようなことせんわけや。と、勝手に想像したんやろ。で、オジョロウサマっていうのは、当時は共通語なんて必要ないやろ。ある特定の農家だけ使うとった言葉かもしれんや。わしゃ、そのうち、聞きに行った。ヤシチロウや。二つ想像してどっちやろと思って。そしたら、今は1人、100いくつにならんやけど、死んでしまうけど、家の衆ら、昔から先祖からそう言うて、呼んどったよと。なんでもか、わしも知らんって。私も知らんって。がくんときたよ。ただし、読む人は、今みたいに、勝手に想像できるんです。

手代木：そうですね。

織田（寛）：通り一遍のウワバミソウでは。

藤 岡：なるほど。

織田（寛）：だから、方言も使ってくれと。こういうことを言うたんや。それから、もう一つ、研究者は必ず、牛首乞食を書くわいね。冬になると、乞食に行ったわけや。Yなんか典型的なもんや。貧乏で、食べ物もないし、乞食したという先入観で書いてあるよ。で、それ、困るちゅうたよ。この歴史をわしは調べて、状況証拠でもないんやけど、歴史と言えるかどうか知らんけど、昔はここは、永平寺のあれやった、曹洞宗かなんや。

織田（毅）：うん、曹洞宗。

織田（寛）：あれには托鉢っていう制度あるわね。で、その坊様がここへ来て、当時、娘をよう売ったわね。絶対、娘は売るなど。困ったらお互いに助け合うさかい、福井県来いと。その当時、特に戦争のなかった若狭辺へ行けど。で、ここで行ったわけや。で、若狭ら辺が戦争なかったもんで、ここに行くと、その当時、白山信仰の全盛時代で聖なる土地、白山からござったかというて、大事にしてくれたんや。で、物置きなんか借りてね、泊まりこむわけよ。で、汚い仕事をするがよ、どぶ掃除とか。そして手間をもらうがよ、じゃがいもでも米でも。そして、人にできると、ありがとうございましたって帰ってくるのよ。こつきと呼んだの。こつきやなしに。ところが蓮如の布教時代、ここが浄土真宗に替わったやろ。浄土真宗には托鉢なんて制度がないんや。それで、年と共に名前もこつきと変わって、今、あんた方が乞食っていうもんに対する感覚と一緒の感覚に変わっていった

の。それでも、乞食するようでも、娘はおらんという、わしは人権問題の先進地やって言いたいんやけど、そこはまあ、小説や。そういう歴史をきちんと書けちゅうたよ、わし。そうせんと、現在、住んどるものが、あそこの先祖は、乞食したとか、貧乏な暮らしとか、嫁にきておらんぞと。研究者が物に書く以上、言葉なら、勝手なこと言えやいいけど、きちんと歴史を調べて書いてくれって。で、Yの、その展示物にも明らかに貧乏で乞食しかできなんだ、乞食しとった村やという先入観で書いてある。Tさんは、そういう書き方はしてないけどね。きちんと調べて、書いてくれちゅうたよ。そういうことを言うたわけよ。そのときは別に、Sさんも反論せなんだけど、ハッポウで食事会したとき、来いっちゅうて行ったよ。飯食べとる途中に、一斉に横文字で反論が始まって、さっき言うた、雑穀のことやら、学名でばばばつと言うたら、わしゃ、何言うとるかわからん。それから、二月ほどしたら本が来たわ。何気なく見とったら、科学政策研究会って書いてあった。これはな、佐藤栄作か、池田か知らんけど、自分の政治に理論づけする研究グループやったらしいのや。だから、主催者がKやら、N、この2人は来なんだよ。あとの連中は全部来たけど。それが、未だに続いとったよね。何気なく見とったら、大臣研究部会講習とかいうて、わしの言うたこと全部書いてあるやん。一字一句。選挙のだけ書いてない。まあ、冗談みたいな話やけど、やはり、きちんと調べて、小説でないものを書いてほしいということと、できたらやっぱり、方言で書いたほうが、読んだ人が、いろいろな解釈ができて、違うとつてもええやないかと。通り一遍の教科書用語では、なんか幅が狭うて、それこそ、共通語やさかいな。というようなことを言いたいです。

■ 考察

滋賀県高島市朽木地域と石川県白山市白峰地域を事例として、トチノミの採集から生産・販売に関して地域ごとの違いや共通点などを明らかにすることを目的に座談会を実施した。

まず、特産品であるトチモチの原料となるトチノミ採集について、獣害等によるトチノミの採取量の減少が両地域で指摘された。また、採る人の高齢化も問題として認識されており、実の減少というよりも、採取する側が変化してきたという側面も採取量と関わることを示唆された。そのため、アク抜きや灰の確保等に手間を要するトチモチ生産を継続的に進めていくためには、トチノミの確保と採集する人材の確保も付随する問題となる。

次に、特産品であるトチモチの製品化には、両地域ともキーパーソンの存在が重要であることがわかった。しかし朽木では、澤田龍治さんという当時行政職員だった個人が旗振り役となったのに対し、白峰では地元菓子店(個人企業)が中心となってトチモチの製品化を進めてきた。白峰地域では、織田毅さん宅が経営する志んさがトチモチを製品化した後、新たに2店舗がトチモチを売りだすようになった。こうしたキーパーソンの特性の違いは、朽木が行政や地域一帯を巻き込んでトチモチを地域振興に活用しているのに対し、白峰では個々の菓子店が競合することによってトチモチが特産品として売り出されるようになる、という現在の状況の違いを生んでいると考えられる。このことは、例えば上述のトチノミと採集する人材の確保という問題に対してどのようなアクターが取り組んでいくのか、あるいは議論の場に誰が参加するようになるのか、といった違いにも反映されていくのではないだろうか。

最後に、研究や外部の研究者が介入することの問題点や意義についてまとめたい。まず、トチノミの確保にも関連する獣害を、住民は深刻な問題として捉えている。そのため、シカやクマの頭数や居住域を調べるといった概要を把握するための調査は彼らにとって意味がなく、実際の問題解決に資するような調査、そして提言が強く求められていると言えよう。このように獣害をはじめとした山間地域が抱える問題の解決に向けて、市町村合併により広域化した行政が、周辺に位置する山村の実情を把握していないという住民の声は重要である。そこには、生態資源としても重要な山間地域において研究者が調査・研究を行い、地域の実情と行政の理解、山村を取り巻く制度との架け橋になる可能性が秘められている。

しかし重要な事は、住民の生活を尊重し、彼らの言葉に耳を傾けることである。そして、難しいことではあるが、安易に学術的な体系に落としこむことの危うさを指摘した白峰の住民の声を、研究者は真摯に受け止めなければならないだろう。この点においては、今回の座談会のようなざっくばらんに話し合える場は、住民の声をそのまま記録するものとして重要である。

今回取り上げた両地域は山地源流部のいわゆる「水源域」である。こうした山地源流部は、下流部に存在する大都市の水瓶ともいえる。座談会でも話題になったように、水源域において山の自然資源と人びとの生活が乖離しはじめていることは疑いのない事実である。近年、特に朽木地域において、人びとが山から離れることに起因するトチノキ巨木の大規模な伐採が静かに進行している。こうした伐採が水源涵養機能にどういった影響をあたえるかに関しては今後の研究の進展が待たれるが、これらの水源域での環境変化は、下流部の住民にも何らかの形で生活に影響する。そのため、上流域の問題を、下流部で生活する都市住民や行政も関わりのある問題として認識してもらい機会を持つことが重要である。例えば、地域が一体となってトチモチ・トチノキを地域振興に活用している朽木では、行政やNPO団体、そして報告者を含む研究者らが協働して「トチノキ祭り」等のイベントを開催し、都市住民を呼び込んでいる。座談会等による当事者同士の対話の場ももちろん重要であるが、このような機会を重ねることで、上流の問題に関心を持ち、行動を起こすようなアクターを巻き込んでいくことができるのではないだろうか。

■ 謝辞

はじめに、忙しいにも関わらず座談会に参加くださった皆さまに何よりも感謝したい。どちらの座談会もとても盛り上がり、予定の時間を超過してまでも話していただいたので、とても有意義な時間を過ごすことができた。また、白峰で座談会ではNPO 白峰自然学校に場所を提供していただいた。ここに厚く御礼を申し上げます。